
秘密の修学旅行
-勢いで襲った生徒がドスケベなマゾ女だった-
「私は本当に先生の事が好きですよ、一切恨んでません」
「まだ信じて頂けませんか？」


『・・・』
「楽しみですね先生♪」
「・・・うん」
「うふふ」


『2人きりで旅行に行きましょう』
彼女に誘われてこの旅行は決まった
あんな事をした後なのに




「うぎっ・・・ぐぇ・・・んっ・・・・」
「好きだ・・・ずっとこうしたかった
ぜったい離すもんか・・・・」
ズブッ
ゴリ♪
ゴッ♪
ズブッ


ドゥ
ドクッ
ブビ
ギュ
ゴポ
ビチャ
ドクドク…


やってしまった・・・
人の居ない部室で
勢いに身を任せて彼女を犯した
これで何もかも失い俺の人生は終わった
そう思っていた


「先生？まだ信じて頂けませんか？」
「いや、その・・・うん」
「私は本当に先生の事が好きですよ、一切恨んでません」
「むしろあんなに激しく愛されながら
耳元で好きだなんて言われたら誰でも堕ちちゃいますよ
思い出しただけで私・・・うふふ」
「そ、そっか」


「もちろん旅行中に先生がシたくなったら
いつでも私を使って下さい」
「ははは・・・」
何を考えているか分からない
でも奥に何か秘めている
そんな不思議な魅力に惹かれていたけど
こんな本性が隠れていたなんて
そのおかげで助かったわけだけど・・・でも・・・
どこまで本音なんだ？
何か狙いでもあるのか？
「あっ、つきましたね」


「わぁ、すごい景色！来て良かったですね！」
（嬉しそうにしてると年相応にかわいいな）
「まだ時間はありますし、ちょっと見に行きませんか？」
「いいね行こうか」


「あっちなんてとても良いですよ
静かで木が生い茂ってて」
「道から見えにくくて
誰も人が居ないようです、うふふ」
・・・ゴクリ


「何もこんな所でしなくても」
「すいません、旅館まで持ちそうにありません・・・
電車に乗ってる時も我慢できなくて
先生でたくさん妄想していたんですよ？」
スリ
スリ
はあ♡
はあ♡
（俺よりよっぽど変態なんじゃないか？）


（おっきぃ・・・アゴ外れちゃいそう・・・・・・）
ぐぽ…


チュッ
グッ
んっ♡
チュ
んぅ♡
チュッ


ブルッ
ブビュッ
ドプッ
ドプッ


はぁ～♡
はぁ～♡
ベトォ…
「あはぁ・・・
顔も口の中も先生の臭いでいっぱい
濃くて男らしいですぅ・・・」


（今更だが人目に付きにくいとはいえ
誰か通ったりしないよなぁ・・・）
ドキ
ドキ
（。。。まぁこんな所で止められないしその時は仕方ない）


あっ♡
ビクッ
ズン…


「あっやばい、人がきた」
「えっ！」
ﾊﾄ
「。。。。」


（せ、せんせい！？）
「ごめん、すぐ終わるから声我慢して・・・」
ぐっ♡
んふ♡
ダッ
ズブッ
ズブッ
ズブッ


ビクッ
ビクビクッ
ビクビクッ
ズヒュ～～～……
ドクッドクン
ビチャ
くくくく


「はぁ・・・はぁ・・・行ったみたいだ」
「バレちゃってたかもですね・・興奮しちゃいました・・」
（・・・俺もこの子と変わらないな）
ふぅ――♡
ふぅ――♡
ゴポッ・・・
「じゃあ旅館に向かおうか」
「はい、あっても、受付の人に臭いでエッチした事ばれちゃいませんかね？
なんて、えへへ」
（怖い事を言う・・・）


荷物を部屋に置いた後
一緒に入りましょうと言われ
各部屋備え付けの小さな温泉に入った


「大浴場もあるのに何でこっちが良いんだ？」
「そっちは男女別じゃないですか
先生と離れちゃうから嫌です、一緒に居たい
「。。。」
「あはっ、おちんちん硬くなってますよ
今ので喜んでくれたんですか？嬉しい」


「こんな感じでよろしいでしょうか」
「あぁ・・すごくいいよ・・そのまま動かして」
「はい♪」
（先生すごく気持ちよさそう
もっと気持ち良くしてあげたい）
ムニュッ
ムニュッ
チュッ♡
チュッ♡


기ㅂㅣㅂㅣ
ㅂㅣㅂㅣ
ㅂㅜㅅ


（精液まみれですげえエロい。。。）
「ごめん、一回じゃ収まらないや。。。」
「っぷは、もちろん良いですよ」
ナデナデ
ブチュ〜♡
ん〜♡
ギュ〜♡
ん〜♡

一度や二度じゃ収まらず
何度も彼女の中に射精した

それでも全然収まらない

グッ
ハ…
ハ…
ズブ…
グプ…
ん～～…♡
て…
と…




いっぱい
だしてね
気持ちいい
射精

「はぁ・・・はぁ・・・ちょっとのぼせちゃったな、そろそろあがろっか」

「んうっ、は、はい・・・・」

（あは・・・まだ出てる・・・・全部私の中に吐き出す気なんだ♡）

ブビュ～～～

ドプ～～～・・・

ゴポッ

ドクドク・・・

身体は熱くてだるいけど

まだ抱き足りない

ぐぅ～～♡

くぐ～

ぐぅ～～♡


上がって少し休んだ後
「あの・・・もうすぐ夕飯ですが・・・」
「ちょっとだけ、すぐ終わるから」
「先生さえ良ければ私は問題ないです、好きに使って下さい♪」


ズブ…
ヌ…
ヌ〜
ヌ〜〜
ヌ〜〜
ヌ〜…
ヌ〜…
ヌ〜…


ズブッ
んっ♡
んっ♡
ズブッ
ズブッ
ズブッ
ゴッゴッ


ドプッ…
ズルッ
あっ…♡
ズ・ビュッ
グッグッ
キュッ


「はぁ・・・はぁ・・・ふぅ・・・
また温泉入らないといけませんね」
その後も夕飯までの間
何度も温泉と自室を行き来した
ん〜〜♡
ふぅ〜〜♡
ビクッ
ドクッ
ドクッ
ブビュ〜〜〜〜


食事が下げられ旅館のスタッフが部屋を出た後
すぐに彼女を寝室に連れて行った
ムニュ
ムニュ
ムニュ・・・
ヌッ
「あっ・・・先生のが私の中の
一番奥まで入ってきてます・・・」


「私に遠慮しなくていいですからね
先生の好きなようにして頂いて大丈夫です」
『・・・』
ズブッ
んっ
ズブッ


ドプッ
ビクッ
ぎゅ
ぎゅ～～…


「そ、そんな・・・
出しながら動いちゃうんですか？・・・あんっ
こんなにされて・・嬉しいです・・・」
ズブズブ
ズブ


「この格好はちょっと恥ずかしいですね」
「・・・いいから尻向けて」
「はい」
グッ


あんっ♡
んっ♡
タプッ
タプッ
ゴズッ
ズッ


ブビュ～～～


（あぁ・・・がっちり掴んで性器押し付けて出されちゃってる・・・
子宮の奥まで先生の濃厚ザーメンに犯されてる・・・）
「ふあぁ・・・気持ち良かったですか先生？
そうだったら私も嬉しいです♡」
「・・・」
ピク
ピクッ
お～～～♡
あ～～～♡
ガシッ
ブビュ～～～！
コポッ
コポコポ…
ドプー…


あん♡
あ♡
ズズッ
ズズッ


「？？？・・・先生？」
ズッ…
!!


「遠慮せず先生の好きなように・・・」
「あのさ、ずっと思ってたんだが俺の事ばっかり言ってるのは何なの？」
「え・・・す、すいません・・・」
「いつも余裕ありますみたいな顔しやがってよ」
「ちがっ、私・・・そんなつもりじゃ・・・」


「無様によがってるツラ見せろって言ってんだよ！」
「ひぎっ」
ドズッ
ズッ
ズッ
ドズッ
「そんな激しくされると・・・苦しい・・」
「ずっとこうされたかったんだろ？この旅行中ずっとよぉ、正直に言え」
「あっあっ・・ぐぅぅぅ・・・」


「・・・はい、そのとおりです！
大好きですぅ！
先生に乱暴されるのをずっと待ってました！」
「まだイクなよ？
今からお前の子宮に
大量の精子ぶちこんでやるから
中で出されたのを感じながらイケ」
「はいぃ！先生の暴力精子がマゾ豚な私の卵子を
めちゃくちゃにレイプして
孕まされてるの感じながらイキますぅう！」
「出すぞっ！」


ブビッ
ギュッ
ブビッ
ビチャ
ドプッ
グッ


「はぁ・・はぁ・・・ふえぇ・・・」
「はぁ・・はぁ・・・・・・・・・・
だ、だいじょうぶ？
もしかしてこういうのが
好きなのかと思って
試しにやってみたんだけど・・・・」
ビュ～～～
ビュ～～～
プシュ♡
「はひぃ・・すごかったです・・・
えっちのあとやさしい先生もすきですぅ・・」
「そ、そうか」
（やっぱよくわからんなこの子）


この後も彼女を抱き続けて
予定していた観光にも行かず
一度も部屋から出ないまま
2人の修学旅行は終わった


数ヶ月後
あの旅行で妊娠したようで
今は彼女と同棲をしている
「ただいま」
「おかえりなさいませ、今日もお疲れ様です」
「お腹でかくなってきたね」
（あと胸も・・・）


「・・・あれ？もしかしてそのエプロンの下って」
「はい着てません、お食事とお風呂の前に
求められたらすぐできるようにと思いまして」
「そ、そっか・・・」
「あら？その気になってくれたんですね。嬉しい」
「こんなの見せられて我慢できないよ・・・
っていうかそんな事言っておいて
君だってする気満々じゃないか」


「はい、今日も一日中あなたの事を考えてました・・・
お腹が大きくなってから遠慮してるようなので言い出せなかったのですが
もう我慢できません♡」
「今日もたくさん愛してくださいね♡」
おしまい









































































































